

ひとみ

発行
相生市教育委員会
(人権教育推進室)
電話 23-7145
令和7年2月号
(第64号)

防災と人権



阪神・淡路大震災から30年

2025年1月17日で阪神・淡路大震災の発生から30年となりました。

1995年1月17日午前5時46分

この日、兵庫県南部を襲った大震災は、多くのかげがえのない命を奪い、いくら年月が経とうとも消し去ることのできない傷跡が人々の心に残りました。

自然の猛威の前ではなすすべがなかったあの日から、災害に備え、命を守るためにたくさんの対策がされてきています。

阪神・淡路大震災では、「過去にない多くのボランティアが駆けつけた」「学生や社会人等それまでボランティアの経験がなかった人が多数参加した」「ボランティアが行政を補完する重要な役割を果たした」ことから、1995年は『ボランティア元年』と呼ばれています。

災害時には、情報不足やデマによる誹謗中傷・いやがらせや、避難所でのプライバシー侵害、支援が必要な方への配慮不足や差別などの人権問題が発生する場合があります、人権に配慮した言動が必要です。

兵庫県では、阪神・淡路大震災から30年の節目を迎えるにあたり、これまでの「忘れない」「伝える」「活かす」「備える」に「繋ぐ」を加えた基本コンセプトが設定されました。

「繋ぐ」とは、震災の経験と教訓を「世代」「地域」を越え、広く継承・共有していくことです。

(兵庫県危機管理部防災支援課「阪神・淡路大震災30年事業の推進」より)

震災等の災害に起因する 偏見や差別をなくそう

震災等の大きな災害の発生時において、不確かな情報に基づいて他人を不当に取り扱ったり、偏見や差別を助長するような情報を発信したりするなどの行動をとることは、重大な人権侵害になり得るだけでなく、避難や復興の妨げにもなりかねません。

正しい情報と冷静な判断に基づき、一人一人が思いやりの心をもった行動をとれるよう呼びかけていくことが必要です。

法務省「令和6年度啓発活動重点目標～人権啓発キャッチコピー～『誰か』のことじゃない。」より

●密接な関係にある「災害」と「人権」●

災害と人権侵害とは切り離せない関係にあります。大規模な災害は多くの命を危険にさらし、人々の暮らしのすべてを奪い、理不尽な苦しみを強いるものです。こうした事態そのものが被災者の人権を大きく損なっているのだということを忘れてはなりません。

いっぽう、災害時には、情報不足やデマなどによる人権侵害が生じることもあります。過去の大災害時には、世界のさまざまな地域で悲劇が起きてきました。東日本大震災の場合でいえば、福島原子力発電所事故により被災地の農業・水産業・酪農業が受けた風評被害、また避難先での被災者に対する心ない対応などもそうした一例です。これらは決して見過ごすことができない問題と言えます。

また、直接の被害に遭った人たちに援助の手を差し伸べなければなりません。

被害者の方々は、その後の避難生活でも多くの困難に苦しむこととなります。なかでも高齢者や障がい者、病人や怪我人、心理的な影響を受けやすい子ども、ことばの壁のある外国人などといった、特別な援助や配慮を必要とする、いわゆる「災害弱者」と呼ばれる人たちの場合、その困難はより大きなものになります。

公益財団法人東京都人権啓発センター「TOKYO人権」第50号より一部抜粋

●人と人とのつながりが防災に生きる●

矢野町在住 松下 昌弘 防災士の話

防災との出会い

2005年1月17日、阪神淡路大震災10周年児童・生徒・教職員追悼式で、地震の3時間前に生まれ、その日に10歳の誕生日を迎えた女の子が作文を朗読しました。「いろいろな人に助けられて今がある。何事があっても、助け合ったら必ず、しあわせがくる」と聞いて、阪神淡路大震災では、失くしたものは数えきれないが、人々のつながりの大切さ、人の心の温かさを知ることができたのではないかと。そうすると、今地球規模で起こる様々な自然災害は、人と人とのつながりの大切さを忘れ、自己中心的な行動ばかりとっている我々人類への自然からの警鐘ではないかと考えました。



小・中学校での防災教育

現在は、防災士の資格を取得し、市内の小学校や中学校で防災の授業を行っています。

子どもたちには、「大切な人の命を守ること」と「人と人とのつながりを大切にすること」を伝えています。

「命を守る」ことについては、
①ハザードを知る ②どんな備えをしたらいいのか
③そのとき、どう対応すればいいのかについて学習しています。

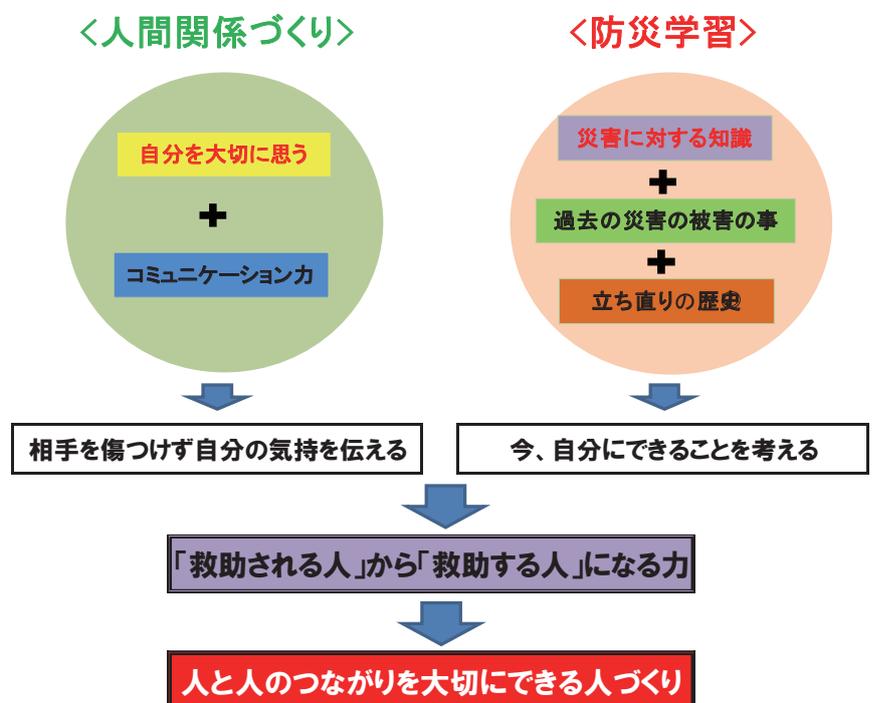
「人と人とのつながり」では、災害をなくすこと、被害をゼロにすることはできませんが、「自助」「共助」で大切な人の命を守り、「公助」と「ボランティア」で被災者が一日も早く元の生活に戻すことが重要で、そのためには普段から人とのコミュニケーションが大切だと伝えています。

おわりに

日本は、災害大国と言われているようですが、それ以上に自然の恩恵もたくさん受けています。豊かな自然を大切にしながらも、災害に備え、これからも防災について子どもたちと一緒に考えていきます。そして、「命」をキーワードとして、防災も人権も福祉もすべてつなげて考えていくべき課題だと思っています。

松下防災士は、子どもたちに人とつながるためには、日頃からの「あいさつ」「返事」「拍手」の実行が大切で、これは誰でも、今日からでもできることだと言っています。私たち大人にとっても日頃から心がけていきたいことです。人と人がつながるまちづくりのために・・・

松下が目指していた防災学習のイメージ図



防災と人権についての作文の紹介

神戸地方法務局・兵庫県人権擁護委員連合会・神戸新聞社主催
第43回全国中学生人権作文コンテスト 兵庫県大会 奨励賞
同西播磨地区予選 最優秀賞

「能登半島地震から人権を考える」

相生市立矢野川中学校 3年 大崎 秀真 さん

今年の元旦、能登半島地震が発生しました。輪島市の火災など、目を覆いたくなるような大きな被害が発生しました。一連のニュースや新聞記事の中で僕が気になったのは、バスで金沢市などに集団避難する中学生の姿でした。突然家族と離れて生活することになり、涙を浮かべている同年代の姿に目を奪われました。また、夏になっても未だに家に帰ることができず、車で暮らしている人の新聞記事を読み、とても胸が痛みました。地震は、そこに住む権利、そこで教育を受ける権利まで奪ってしまったのです。

災害が起こったときに、どんな暮らしをすることになるのか調べてみました。

震災の場合には、小学校の体育館や公民館など決して広くはない避難所に集団で何ヶ月も過ごすなければいけないことや、避難所に入れず半壊状態の自宅で孤独死してしまう人がいることも知りました。このような環境は、僕たちのような元気な人でも耐えがたいですが、高齢者や障害のある人、妊婦さんなどにとってはより過酷で人間の尊厳を守ることが難しい状況だと思います。いわゆる「災害弱者」への十分な配慮がされているか心配です。

一方、イタリアの避難所は、広場に大型のテントが並んでいるそうです。そのテントは、歩いて入れるほど屋根が高く、家族ごとに割り当ててもらえます。ベッドや冷暖房装置もあります。また、トイレやシャワーは移動コンテナ式で清潔に保たれています。食事也非常食でなく、温かい料理を食べることができます。

避難所の料理担当者のインタビュー記事がありましたが、「温かくて美味しいものを食べれば、元気になるだろう。それが生活を立て直す上で最も大事なんだ。」とっていました。避難している一人ひとりの尊厳が十分に確保されており、日本とはあまりにも環境が違っているとショックを受けました。

欧米では、「避難所は、被災したすべての人が安心して健康的に過ごせて、生活再建に向けて力を蓄えてもらう場」という意識が共有されているそうです。これは人権を保ちながら生活できるかを被災者目線で考えたとき、最も大切なことだと思いました。日本でも同じような取り組みや意識改革が進んで欲しいと心から思いました。

家族で、災害時の人権について話をしていると、父が、「この地域には、地域の独居高齢者や障害のある人など、災害時に支援が必要な人を把握する災害時要援護者支援事業という制度があるんだよ。日頃から災害弱者の方々を地域で把握しておいて、いざというときに地域の繋がりの中で避難の支援を行うという『共助』の取り組みなんだ。まさに災害弱者の方の人権を守るための取り組みだと思うよ。」とっていました。

僕の住んでいる地域では、お祭りや清掃活動など地域行事を通じて、各家庭が顔の見える関係を築いています。その繋がりが、災害時にもお互いを助け合い、個々の人権を尊重できる環境になっていると思います。それが僕たちの地域の強みであると思いました。

僕も、お祭りなど地域行事には積極的に参加する、近所の人にあいさつをするなど、地域の「繋がり」を大切にしていきたいです。

また、僕は、生徒会長として、能登半島地震の被災者への募金活動を行いました。中学校の校内やスーパーの店頭で声を張り上げ募金を呼びかけました。多くの方々が、被災地の心配や被災者の生活状況について僕たちに声をかけてくださり、約十二万円もの寄付金が集まりました。他人に無関心な人が増えているとよく聞きますが、本当に多くの方が被災者に心を寄せられていることを実感でき、安心しました。そして、僕たちが皆さんの想いをつなぐ橋渡しになることができ、とても誇らしく思いました。

今年は、八月にも宮崎県や神奈川県で大きな地震があり、南海トラフ地震の危険もあると言われています。被災者の人権を守っていく取り組みはますます必要とされていると感じます。

そして、来年、僕は高校生になります。もっと大きなステージに立ち、困っている方々、人権がないがしろにされている方々に手を差し伸べ、寄り添う活動を行っていきたいです。

それぞれの地域で、各家庭の顔が見える関係を築くことが、災害時にお互い助け合い、個々の人権を尊重できる環境につながるということを教えてもらった作品です。

相生市の小・中学校の防災学習の様子

矢野小学校 4年生防災学習

令和6年11月19日

矢野小学校 4年生が、災害が起きた時の避難所生活について、防衛省自衛隊 兵庫地方協力本部 相生地域事務所長 河村武彦 1等空尉からお話を聞きました。

阪神・淡路大震災の実際の映像から、避難所生活の困難さを知ることからはじまりました。自分たちの住んでいる兵庫県でこのようなことが起こっていたと知り、避難所運営の大切さに気づきました。避難所には、たくさんの方々が避難してきます。不安な状況の中、自分だけの空間やプライベートもなく生活することはとても



阪神淡路大震災の話聞く子どもたち



避難所のスペースを確認する子どもたち

大変なことだからこそ、お互いに気遣い合う、お互いの立場を思い合うことが大切になると考えました。

避難所では、名簿班、給食班、物資班、給水班、救護班の役割や児童スペースや授乳室などが必要になるそうです。避難所を運営するためには人々の協力が不可欠です。そのためには、日頃からのまちづくりと時ずなづくりが大切だと子どもたちはこの学習を通して学びを深めました。

那波小学校親子ふれあい活動（防災学習）

「あなたは自分の身を守れるか!？」

令和6年10月27日

那波小学校では、PTA主催で児童や保護者、未就学児約140人が参加し、相生市防災監を講師として防災学習を実施しました。地震についてどういう準備をして、どこに逃げたらいいのかを考えることができました。

（１）地震に関する講話

紙芝居「津波だ！ いなむらの火をけすな」の鑑賞とハザードマップの見方

（２）防災〇×クイズ

家庭や学校で地震が起こった時のとるべき行動や避難したときの必要な知識

（３）那波小危険箇所確認

体育館、トイレ、ろうか、階段、教室で地震が起こった時に、危ないものは何か、どのように身を守るか等の確認

（４）避難所体験

プライベート空間の確保、段ボールベッド・簡易トイレの作成の体験



紙芝居による講話



段ボールベッドの作成

相生市防災監のお話

災害はいつ起こるかわかりません。大切な人を、家族を守るためにも、できることから少しずつでもいいので準備をし、もし災害が起きたときには、まずは自分、そして家族、さらにご近所の方の命を守る行動をぜひお願いします。

参加者の感想

（児童）阪神淡路大震災の時は、今よりもっと避難生活が大変だったことがわかった。みんなで協力することが大切だと思った。

（児童）地震が起きたときにどうしたらいいかわかった。もしもの時、教えてもらったことを生かして命を守りたいと思った。

（保護者）避難されている人に対して、避難しているのだから仕方がないと我慢を強いるのではなく、プライベートの確保や食の環境など人として大切にされなければならないと感じた。

（保護者）学校は避難所に指定されているから安全というイメージがあったが、実際に危険箇所はないかという視点で見て回ると、窓ガラスが割れたり、壁に備え付けられているものが落下したりと気を付けないといけないことはたくさんあった。子どもに、どんな場所でも自分の身を自分で守ることが大切だと伝えていきたい。



避難所体験



危険箇所確認

まちの人権トピックス

パラスポーツフェスAIOI 11月30日(土)

相生市民体育館

パラスポーツとは

障がいのある人のために考えられたスポーツや障がいの有無にかかわらず取り組めるスポーツについて広く表す言葉です。一般のスポーツのルールを一部変更したり、用具を用いて工夫したりすることで、楽しく安全にスポーツを行えるようにしているほか、ボッチャなど、もともと障がいのある人のために考え出されたスポーツもあります。

最近では、障がいの有無にかかわらず**共に楽しめる**という点も注目されています。

相生市でも、誰もが安全に楽しくできるパラスポーツをたくさんの方に楽しんでいただけるようにパラスポーツフェスAIOIが開催されました。

この日は、「パラ卓球」「卓球バレー」「ボッチャ」「フライングディスク」のスポーツをそれぞれ楽しまれていました。

パラ卓球国際大会・フランスオープンでシングルスとダブルスの2種目で優勝された関西福祉大学4年の北川雄一朗さんが、デモンストレーションとしてラリーをしてくださいました。

卓球の技を磨くだけでなく、繊細な車椅子の動きを使いこなすことは、とても高度な技術が必要とされるそうです。



パラ卓球



ボッチャ



フライングディスク

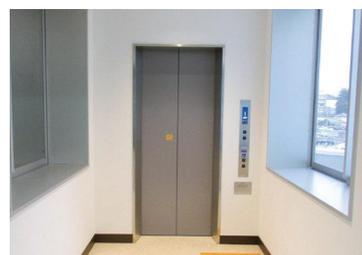


卓球バレー

市民体育館のバリアフリー化（令和6年4月25日竣工）

エレベーターや手すりの設置、多目的トイレの改修、段差の解消等が行われました。

バリアフリー化が進んだことで、子どもから大人まで、誰もが今まで以上に体育館を利用し、生涯を通じたスポーツが楽しみやすくなりました。



「防災について考える」絵本の紹介

「百年後を生きる子どもたちへ 『忘れないふるさと』の記憶」



(農文教) 豊田 直巳 / 写真・文

東日本大震災による原発事故で、突然、放射能にふるさと（郷土）を追われた人々の苦悩や取組—避難・転居・郷土調査…、いつか帰ってくるかもしれない子どもたちに向けた願いや取組—郷土の再発見・記録集づくりなどをつぶさに伝え、静かに問いかける写真絵本。第66回山系児童出版文化賞対象「それでも『ふるさと』全3巻」続編。

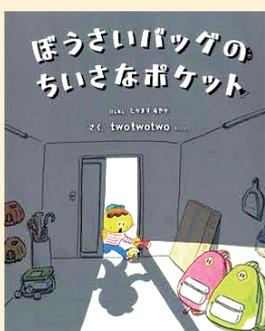
防災100年えほんプロジェクトから3冊ご紹介します

「防災100年えほんプロジェクト」とは、「絵本」の力を借りて、子どもから大人まで「防災」の知恵を知り、命を守る行動を身につけるためのプロジェクトです。このプロジェクトは、100年先の未来まで防災の知恵を届け、世界の防災・減災に貢献することを目指しています。

「たったひとつのおやくそく」

かなざわ まゆこ / 作・絵 よこばやし よしずみ / 原案

おじいちゃんのおはかまいりで、まりは、おかあさんとたいせつな「おやくそく」をしました。そのやくそくとは・・・？津波から命を守る「てんでんこ」から着想した絵本です。ご家族で読んで、お約束を考えてみてはいかがでしょうか。



「ぼうさいバッグのちいさなポケット」

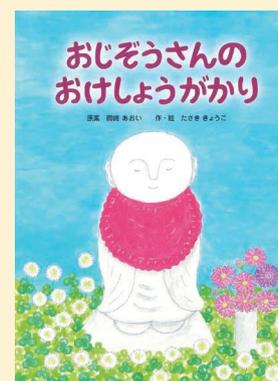
たかます あやか / 原案 twotwotwo (ににに) / 作

大きな災害に備えて必要なものはなんだろう？家族で一緒に考えて、防災バッグをつくろう！防災100年絵本プロジェクトがおくる、お子さまの視点で描いた「はじめてのそなえほん」備えチェックリストつきです。

「おじぞうさんのおけしよがかり」

御崎 あおい / 原案 たさき きょうこ / 作・絵

おばあちゃんは、日曜日になると、丘の上のおじぞうさんをぴかぴかにします。ある日、丘にまよいこんだ子どもに、おじぞうさんの話をはじめました。「自然災害伝承碑」の大切さや、語り部との交流を伝える絵本です。



ここに掲載している絵本は相生市立図書館で借りることができます。